

『星影拾遺・異聞』

～その簡単な紹介～

1998/5/9 マスター：久保田 秀和

1、セッションの計画（日時、場所）

セッションは1998/5/9（土）の昼間、及び1998/5/16（土）の夜の二日にかけて行われます。

募集プレイヤーは三人。

本日 5/9 は夜から新歓コンパがあるため、それに間に合うよう、キャラクターメイキングのみを行います。また、本日のキャラクターメイキングはそう時間もかからないでしょうから、16時過ぎからはセッションの舞台の主な舞台となる下鴨神社付近を散策したいと思います。

5/16 の夜にようやく、テーブルを囲んでお話を始めたいと思います。二日かかりということで、時間に都合のつかない方、誠に申し訳ございません。

2、セッションの概要

物語内も時間は1998/5/9（土）より始まります。

舞台は上にも書きましたが、京都市左京区下鴨神社の周辺です。

内容は「影」を主題にした童話。

影、異界の影、そして二重身（ドッベルゲンガー）。

みなさん、下を向いて歩いていますか？

上を向いて歩くのも元気があっていいですが、たまには下も見やらないと、思わぬところでけつまづくことになります。太陽の世界ばかりでなく、それによって焼き付けられた自分の影を見ることも大切。かく言う私も、先日久々に自分の影を観察してみたのですが、クルクル回ってみたり、踏んでみたりするとなかなか面白いものですよ。

セッションでは皆で一緒に、15歳の子供たちに思いを託し、影の物語世界を探索してゆくことになります。現実と幻想の狭間で様々な者と出逢い、話を聞き、「影」についての自分の答えを見つけだすのです。セッションの目的はそれ以外にありません。

こんなセッションですから、サイコロを振ったり、何者かと剣を交えることはありません。もし刃を向けることがあるとすれば、それは自分の心に対して自分からなされるものでしょう。

ともかく、会話のみでセッションは構成されます。けれども、上手くしゃべれる必要はありません。それどころか、そういう方ほど（こうしたセッションを経験したいと望まれるのならば）大歓迎しています。

活劇ものに比べるととても地味な内容です。落ちついて話のしたい人向けでしょうか。

3、セッションの過程

はじめての方も多いためですので、セッションの過程について短く説明しておきます。

はじめに、プレイヤーにはそれぞれ、マスターの準備した各キャラクターの短い設定と、それに関してよく分からないようなところが質問として配られます。（次のページ以降に掲載されています。）自分の担当のキャラクターの設定へ向けられた質問に答えながら、セッション中、自分がその設定のどの辺りに注目してプレイするかを考えておきます。

設定はプレイヤーがどんどん書き加えていってもらってかまいません。マスターが変更をお願いすることもあります。大部分はプレイヤーに任されています。

物語が始まると、さまざまな出逢いや怪異が待ち受けています。そこからはきっと物語のヒントを得ることができるでしょう。自分の注目する設定と、そのヒントを自在に組み合わせ、物語を自分なりに解釈して行きましょう。ヒントがあまりに不可解で手に負えないこともあるかも知れませんが、もちろん、そんなときの為に私たちは仲間と一緒にセッションを行っているのです。すぐさま他のPCやNPCに尋ねてみましょう。

4、附記

そもそも私は、一セッションの多様な解釈を求め続けていることから、このセッションには過去のセッションの語り直しとなっている部分も少なくありません。過去のセッションの帰結を知っている方は、それはそうとして別の解釈を求めて頂きたいと思います。

5、参考資料

今回のセッションの準備において参考とした主な資料です。面白いのでいつか読んでみても良いと思いますし、一週間の内に読み上げて、マスターを驚かせるのも面白いでしょう。

- ・影の現象学（河合隼雄、講談社学術文庫）
- ・星の民俗学（野尻抱影、講談社学術文庫）
- ・is67（特集＜影＞イリュージョン）（ポラ文化研究所。京大図書館の雑誌架にもあるはず）
- ・色 染と色彩（前田雨城、法政大学出版局。京大図書館でも借りられる。8-47 イ 2）
- ・日本人と異界（小松和彦、NHK 人間大学 1993/10 12 のテキスト、入手は困難？）
- ・古事記物語（太田善磨、現代教養文庫）
- ・以下は WebPage：

ASTRONOMICAL FOLKLORE Homepage:
<http://www.city.yokohama.jp/yhspt/ysc/izumo/>
「星影拾遺」:Story/Illustration/RPG:
<http://member.nifty.ne.jp/fluorite/>

（マスターの WebPage です。）

『星影拾遺・異聞』

セッション 5/9 一部、5/16 二部
マスター 久保田 秀和 (六回生相当)

◆概観

▼時・処

1998年5月9日(土)

京都市

左京区下鴨

▼登場人物

二卵性双生児の兄妹と、その従兄弟

その他、言葉ある動物や怪など

▼双子の兄妹

二卵性双生児。ともに15歳。

父、正治(ショウジ)、母、添子(ソエコ)。

民俗学者の正治は1995年の四月に交通事故で他界。
享年45歳。

添子は兄妹を生んだ直後に産後の肥立ちが悪く、他界。
享年30前後だったという。

添子は父親がフィールドワーク先のタイで出逢い、結婚。
出産も現地であった。

現在、兄妹は伯父の正太(ショウタ、50歳)の元に
引き取られている。

正太には、兄妹と同じ年の息子がいる。

▼正治(ショウジ)

タイの民間信仰についての研究が主であったが、
兄妹誕生以降は、星の民俗学に執心する。

眼鏡と顎をおおう髭の印象深い、

夢見がちな人物であると正太は評している。

▼添子(ソエコ)

正治によると、言葉では言い尽くせぬ程、美しい人であ
ったという。が、写真は一枚も残されていない。タイで結婚
し、そのまま他界したため、どんな人物であるかは正太も知
ってはいない。

▼正太の住居

左京区下鴨松ノ木町(下鴨神社のすぐ北)

正太の実家である。正太の両親は、もはやいない。

この家に、双子の兄妹と、

正太の息子であるその従兄弟と一緒に住んでいる。

正太夫妻は共働きであり、日中は誰も人がいない。

◆PC設定(マスター担当分)

▼双子の兄

マスター担当分の設定では、セッション中で最も解釈の容
易なキャラクターとなる予定である。

逆に言うならば、プレイヤーがその自由度を活かして、好
きなだけ難しくも出来る。また、そうでなければ、影に関し
ては当事者となって考える機会が少ないだろう。

- ・自分が父の実の子でないのではないか、
という疑問を打ち消せないでいる。
それはどうしてだろうか。
では一体、自分は誰の子であるのか。
- ・母、添子らしい人物の夢をよく見る。
しかし、その瞳を見るにつけ、それがどうしても妹のもの
のように思える。
親子であるから当たり前のはずであるが、しかし、それが
本当に妹自身であるように思えて仕方がないのだ。
それはどうしてだろうか。
- ・出生の秘密を求めて「シロの森」(後述)に行こうとして
いる。手がかりは父の残した最後の原稿。三年前のある夜、
父は「少し話したいことがあるんだ。」と言った。その夜は結
局、逡巡する父から何も聞き出すことは出来なかったが、
「もう少し考えをまとめてから話すことにする。」そう言った
時の、苦渋に満ちた顔のまま、手を付けていた原稿がそれ
であった。結局、原稿は仕上がらぬまま、父は他界した。こ
れこそが、自分の出生の秘密を解く鍵になると信じている。
- ・「あれが母さんの星だよ。」
幼い頃、父親に大熊座のミザールを指して母親だと言
い聞かされていた。それだけが、父が母のことを語った、唯
一具体的なものであった。

▼双子の妹

謎の構造は従兄弟の少年よりは見えやすい。
解釈もそう多くはならないだろう。

- ・ 去年の冬から春（11月初頭～3月半ば）まで神隠しに
あっていた。その間のほとんどの記憶がない。

（外傷その他、不審なところはない。）

神隠しの間の残っている記憶は、
自分のいた場所が

「シロの森」

と呼ばれる処だということ。

また、自分の側にはやさしい鬼がいて、

「はじまりの鬼」と呼ばれていたこと。

それだけである。

「シロの森」とはどこにあるのか。

「はじまりの鬼」とは一体誰なのか。どんな鬼なのか。

なぜ神隠しにあったのか。

- ・ シロの森から帰還したことがきっかけで、
自らの故郷喪失感に気付く。
今自分がいるここは、本来自分の居るべき場所ではない、
自分が自分らしく居られる場所が、他にある、

.. どうして、そう思うのか..

そしてそこがきつと、シロの森である、と。
シロの森を探し出し、
優しかったあのはじまりの鬼に会いに行こうと思っている。

- ・ それは夜毎に見る夢...

「お願いします。どうか私の森を守って下さい。」

それは小さな祈りだった。
その声は、ほんとうに小さな声だったので、
この世界のほとんどには聞こえなかった。
もし聞こえても聞かなかつたふりをした。
しかし、それは自分の胸にだけ、
届いたような気がするのだった。

この祈りの主は一体誰なのか。
どうして自分にだけ聞こえたのか。
森とは一体何処であるのか。

▼従兄弟の少年

最も謎の構造が見えにくい、自在にパズルを組み立てて
一つの解釈を創り出す面白さがあるかも知れない。

- ・ 小さい頃にこんなことがあった。
皆と“かくれんぼ”をしていたとき、どこかに隠れた貴方は、
ずっと鬼に見つかることがなかった。日も暮れてきて、今思
えば、友達はみなもう家に帰ってしまっていただろうに、なぜ
だかそのまま隠れ続けていた貴方は、夕暮れの空に現れた、
ものを言う大ガラスと出会った。

そのカラスは三本足で、自分は「ヤタガラス」とであると名乗
った。

ヤタガラスは貴方の目の高さまで降りてきて、
続けて言うことには、

「おまえはいつか影となって、
大切な者を森へと導かねばならない。」

そうして、カラスは夕日へ向かって飛び去ってしまった。
後で気付いたことであるが、ヤタガラスはとても大きな姿だ
ったにもかかわらず、その影を全く持たないのだった。

以来、いつか誰か大切な人を導かねばならないのだという、
そんな使命感にも似た気持ちを持っている。

ヤタガラスとは一体何者であるのか。

- ・ 大切な者とは従妹であると思っている。
どうしてだろうか。

- ・ ある朝、目を覚ますと自分の影がなくなっていた。
それをきっかけに、ヤタガラスに言われたことを気にしてか、
それとも影を取り戻すためか、双子の兄妹をはじまりの森へ
と導こうと決心した。

- ・ 影が失われたことは何を示唆するのか。

「ホシノヒトについて」

今回はホシノヒトのことをお話したいと思います。彼らについての一番かんたんな説明は、天上の星が地上に降り立つときの姿である、というものだと思います。このような話は、私が以前、主な活動の場としていたアジアに限らず世界中どこでもよく見つけられるもので、彼らが私たちの前に姿を現すのは、女性ならば水浴びのため、男性ならば何か気の向いたとき、特に収穫祭や星祭りの間に地上まで降りてきたときのこととされています。

近世以降のホシノヒトの目撃談として、アジアでは西洋人風の、ヨーロッパでは東洋人風のエキゾチックで印象深い姿をしているというものがみられます。その姿はほとんど人間と区別のつかないものですが、ただ夜にはその体から強い光を放ち、この光こそがホシノヒトに就いての顔であるとされています。このあたりは、異人の往来の増加や、ガス燈などの登場にまつわる都市伝説と言えるでしょうか。

日本人にとって親しみ深いと思われるのは「星型羽衣伝説」と呼ばれる一連の言い伝えでしょう。七夕の逢瀬や羽衣を取られて帰れなくなった天女のお話は多くの方が御存知だと思いますが、「星型羽衣伝説」はその両方を併せたような言い伝えで、アジアの各地に残されています。天から降りた星の娘が、人間の男に羽衣を隠されて、天に帰れず妻となるのですが、結局は見つかって、娘は天に帰ります。それに加えて、男も後を追って天にのぼり、ついには7月7日の夜にだけ会えるようになるというものです。

インド：7大仙人はカーシャパ、アトリ、ヴァシシュタ、グイスパーミトラ、ゴータマ、ジャマダグニ、バラドワジャの7名であるが、これらは北斗七星であるとされる。實道27宿をあらわす12ゾグシャ仙人の魂スワハは、7仙のうち5人の妻に引けて誘惑され、6仙の5名の妻は不徳でアレス星降になった。ただし人愛の心で誘惑されたゾグシャ仙の妻は、夫のとなりでアルゴルとして死んでいる。

--- 正治の最後の原稿 ---
(童話誌の連載であったという)

(天文民族学のホームページより)

ホシノヒト目撃譚は日本以外に多く、タイにはピー(精霊)の一種として伝えられていますし、ヨーロッパでも星の伝説と関係した話が幾つか伝えられています。そのどれもがホシノヒトは足が速いとしていますが、これは星が夜空を半日で駆け抜けることと関わりがあるでしょうし、プレアデスとオリオンにまつわるような星追いの伝説との混同ではないかとも思われます。実際、「星型羽衣伝説」には先ほどの七夕型に対して七星型というものもあり、こちらでは天女がプレアデスの失われた一星(*)であるとも言われています。

民俗学者のなかでもこうしたホシノヒトの研究者は少なくありませんが、そこには生まれた世界を異にする者へのせつない思いがあります。竹取物語ならば月ですが、星の世界もまた、常時、目に見えるにも関わらず、遠く手の届かない世界です。

私も、もう二度と会えぬ人の面影を抱えつつ、星を見上げることがあります。

(*) 「プレアデスの失われた一星」

日本では昴ともムツラボシ(六連星)とも呼ばれますが、後者の名の示すとおり、プレアデスは6つの明るい星の集まりです。しかし、これを7つと数えたり、昔は7つだったとする言い伝えが世界各地に存在します。

中国の金星。

太

ア

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星

星